

不明になった。巡視艇が出動するやらなにやらで前景気は上々だったが皮肉なことに肝心のヨットが太平洋横断の疲れから本当に黒潮に流され、とうとう引航されて日本にたどりつく始末となってしまった。

新聞社からの待ったが、本当にあったのかどうかの真偽はわからないが、もしうわき通りならその青年は自らの冒険の成功を演出された歓迎との引き換えにマス・コミに売ってしまったことになる。マス・コミに乗るつもりが、完全に乗られてしまったわけだ。さらにこのストーリーは二幕に続き、投下資本の巧率化をはかる新聞社側によってこの青年は二度演技を努めさせられることになる。横浜からヨットはトラックで大阪に運ばれ、大阪湾上で青年は再度ヨットに乗りこみ神戸港中突場に郷土の英雄として入港、再び紙面をかざることになっていたのである。崇高なアマチュア精神はどこへやら、こうなるともう完全なプロである。苦々しい思いをしたのは後援社以外の新聞の論調にもはっきりうかがえるようだった。

『太平洋ひとりぼっち』の堀江青年以来、ヨットによる冒険、探検は行きつくところに来てしまった感じだ。つきは何をもって現代の探検家たちはマス・コミに乗ろうというのだろうか？

探検とはある意味では精神的なもの、苦難を自己に課し、それをやりとげる純粹さ、未知にいきみ、それを知る喜び、といったものだと筆者は思っている。たとえ個人的行為であってもやりとげたあと、じっと喜びをかみしめるときの感激、そして後になっての想い出はなにものにもかえがたいものだろう。

わが関大探検部諸兄、『なんだつまらないこと』『遊びやないか』などの雑音に耳を貸すな。前述の××大学のグループが無事帰国後若干の装備とフィルムなどをもらったため後援新聞社にそれらしい文化的な？報告書を出しているのを見たとき筆者はむしろ気の毒な気がした。マス・コミは貪欲なまでに目新しいものを追い、英雄をつくりたがる。だがあきればボロボロのように捨てさる。われわれ学生探検はこんなマス・コミの非情を目から離れた、けだかい行為にしたいものである。

諸君の探検部員としての学生時代の想い出が数枚の新聞スクラップだけ、というのはさびしいかぎりではないか。『本当にやりたいことは何か』もっとつきつめて考えてほしい——といまはマス・コミのメシを食う探検生 O、B は思うのである。

しげかね・わたる (O、B)

探 検 部 10 周 年 に 想 う

古 谷 精 宏

今から3年ほど前、昭和39年4月小生が主将という部の重責を荷なった頃、クラブ内は山岳パート(通称技術研究会)と雌鳥パート(通称雌鳥調査班)との二つが漠然と分れていた。新入生募

集をすまし、夏の一番長い活動時期を迎え、我々役員会は、はっきりと今後のパートの活動を重視し、尚かつ、探検部としての一つのまとまりを持つ意味で少々のわりはあったが1週間の全体合宿

を北アルプスに求め、その後、山岳パート（技術研究会）、民族調査パート、洞窟パート、ボートパート、そして全く初めてのアクアラングパート活動をその後に行った。

それから3年、各パートの技術、並びにその学術的要素は深まり、高度のレベルに向上した。

今後の活動範囲は必然的に海外へと向けられていくであろう。

しかし今、小生はその頃の活動をふりかえってやはり学生探検とはその探検的活動に於て「大いなる自己満足」とでも言い変えることの出来る活動ではなからうかと思う。では「探検的活動とは？」という事であるが、これは各自一人一人が己の心の内にあり、一人様であって又しかるべきだと思ふ。

今の小生には学生探検とは何かという事を考えることは、小生の現状生活状態を振り返ると純粹さという点に於て少々疑問である。

以下小生の私見であり、果して現役諸士の活動をスムーズに行き事に対して激励の言葉となり得るかどうか我れながら甚だ疑問であるが――。

今後の探検部の行き方はいかにあるべきかについては、昔から何度となく議論され、結論のでないまま4年たてば大方の人間は卒業していき探検部を離れ、探検を離れていく。ただ気持の上で探検部でつちかわれた、バイオ・アスピリットは一人一人の心の内に大なり小なり続いているであろうが……。

小生は卒業後一サラリーマンとして2年、2度

目の会社に勤めている。

しかし小生考えるに学生時代は5年～6年送るべきではなからうか。

そしてその内の1～2年を少人数で海外で送る。そしてそこでの生活活動を関西大学内探検部という一つの事務局に原稿を送る――。その海外での活動地域は摩天楼のそびえる都心での生活か、あるいはジャングルの中か、山岳での生活か、それはいづれでもよい。言えることは決った様に合宿を行い、小さくまとめることは意識的にでもさけるべきであろうと思う。

このことは小生、卒業後に初めて肌で感ずる事でもある。

己の気持の持ちよう一つでなんとでもなると言うものの、やはり社会というワタに入ると行動範囲がある程度制約されることは、どうしようもない事ではなからうか。一個の不完全な人間である以上――。

関西大学内に於て探検部というものの存在は大きくクローズアップされているとの事も聞く。しかし探検部に入っている以上、そんな事にいちいち心をわずらわす必要はないし、各自の思いのままに行動するのが我が道に於て必要だし、それが己の特長とすべきではなからうか。

探検部の成長を切に祈ると共に、小生も又一層の努力をしなければと思うしだいである。

はなはだ簡単ではあるが探検部10周年にあたり、小生の私観とする。

ふるたにきよひろ（O.B）

